

成人看護学臨地実習における指導上の問題と課題の検討 ～教員カンファレンスの内容分析を通して～

PROBLEM ON THE GUIDANCE AT CLINICAL PRACTICE IN ADULT NURSING AND STUDY OF SUBJECT

～ BASED ON QUALITATIVE ANALYSIS OF THE MINUTES OF CONFERENCE～

竹田 理恵¹⁾ 根本 良子²⁾ 阿部 春美¹⁾ 村井 麻子¹⁾
Rie TAKEDA, Ryoko NEMOTO, Harumi ABE, Asako MURAI

キーワード：成人看護学臨地実習、実習指導、指導上の問題、教員カンファレンス

Key words : Practice of Adult Nursing, Guide of practice, Problem on the guidance, Teacher conference

要 旨

目的：本学成人看護学実習における教員カンファレンスの内容分析を通し、教員が感じている臨地実習指導上の問題と今後の課題を明らかにする。

方法：議事録の中から、報告された事象を抜き出し、同質のものについてまとめ項目毎にラベルを付け分類し、その後、臨地実習の時期を前期・中期・後期に分け、問題状況が起こった時期と内容を比較する。

結論：議事録に報告された質的データは10個の大項目に分類された。学習に関すること、実習態度、学生と患者の関係、インシデントに関するものが実習前期に多かった。学生の様子や訴えに関するものは、実習時期に関わらず報告があった。指導上の問題は多岐にわたり、教員の対応は複雑かつ流動的でその場により異なるものであった。実習前期において教員の負担が大きく、複数の教員での対応や指導経験の少ない教員への支援が必要である。

1) 仙台青葉学院短期大学 看護学科 2) 前仙台青葉学院短期大学 看護学科
受理日：2016年2月1日

I. はじめに

看護学は実践の学問であることから、医療現場での看護実践の基礎的能力を養う臨地実習は看護教育において重要な手段であり、看護学生にとっては講義や演習で得られた知識・技術を統合し看護を実践的に学習する重要な場である。

看護を必要としている人に対する支援は予測できることばかりではなく、臨地実習における教育内容の選択や判断は複雑で流動的である。そのため、看護学臨地実習指導における教員の悩みや問題は大きい、と言われている。

平木¹⁾は、臨地実習指導上の困難について、教員は「学生が何を考えているかわからない場合」や「指導の手ごたえがないような漠然とした状況」について特に困難と捉えている、と述べている。

先行研究では、臨地実習に対する学生の不安や体験する困難に関する研究は複数見られているが、教員が指導場面でどのような問題や不安を感じどのように対応しているかについての研究は少ない。

II. 研究目的

本学では、臨地実習において、教員が指導に困難を感じる、または問題と捉えられる状況が多々見られており、実習中に成人看護学領域会議・教員カンファレンスをおこない、教員間で学生指導の問題解決を図り対応してきた。

そこで、今回、成人看護学領域会議・教員カンファレンスの内容分析を行い、臨地実習指導上において教員が困難や問題と感じた現状を明らかにし、今後の実習指導の方向性や課題についての示唆を得ることを本研究の目的とする。

III. 研究対象

1. 成人看護学臨地実習と指導体制について

1) 成人看護学領域臨地実習は、本学の看護学科3年生が5月から11月までの実習期間において、5-6名に分かれ14グループを編成し、それぞれ3週間の慢性期実習と急性期実習、計6週間を実習する。

2) 臨地実習では教員1名が1グループの学生指導に当たり発生した問題に対処・介入を行い、領域の教員間で問題状況の共有やその後の対応を協議するため、週1回、30分から1時間の成人領域会議・教員カンファレンスを実施し、発生した問題状況についての報告や相談をおこなっている。

2. 研究対象について

平成24年5月から11月までの成人看護学領域会議・教員カンファレンスは計14回開催されており、その内容が記された議事録と、会議で取り上げられた事例のインシデント報告書を研究対象とした。

IV. 研究方法

1. 議事録に記載された事項の抽出

平成24年5月から11月までの計14回の成人看護学領域会議・教員カンファレンスの議事録から、報告された事象を抜き出し、事象毎に細目分類し「小項目」として通し番号をつけた。それらを個々に要約し意味内容の類似したものを「中項目」としてラベルをつけた。さらに同質のものについてまとめ、「大項目」として項目毎にラベルを付けた。

ラベルを付ける際には、抽象度が一定になるように、また、評価的視点を含まないように、質的研究の経験者である共同研究者を含む複数の研究者間で検討し、信頼性を保つようにした。

2. 問題が起こった時期の比較と今後の課題の検討

その後、臨地実習の時期を前期・中期・後期に分け、分類されたラベル毎に問題が起こった時期と内容を比較し、指導上の問題に対する今後の課題について検討した。

V. 倫理的配慮

仙台青葉学院短期大学 研究倫理審査委員会の承認を得た。(承認番号 2702)

学生には、成人領域臨地実習の効果的教育内容の検討をおこなうためにデータを使用する事について、臨地実習に入る前に同意書を用いて承諾を得た。その際には、説明書を用いて、研究の自由

参加、途中辞退の自由、研究への協力の有無により不利益が生じない事、データは無記名で扱い個人が特定されないように使用する事について説明をおこなった。教員においても、同様に主旨を説明し同意を得た。データを議事録から抜粋する際には、無記名で扱い、個人が特定できないよう配慮し、得られたデータは、本研究のためにのみ使用した。

VI. 研究結果

1. データの分類

議事録に記載された質的データは、175の文章であったが、それを事象毎に細目分類すると、358のデータとなった。それらを個々に要約し、94個の「肯定的なもの」を除いた264のデータを同質のものにまとめると、58の中項目となった。さらに同類の項目に分類し、大きく10の大項目にラベルをつけることができた。(表1)

件数の多かった順に、各項目の詳細をみると、実習スケジュールについての実習施設との調整、病棟内の環境調整、病棟スタッフとの認識の相違点、実習施設からの意見や要望、学生の履修状況や学習の進捗状況に関しての情報共有、受け持ち患者の情報や経過に合わせた実習内容の検討、学生の実習配置などの「臨地実習を実施するための調整に関する事」が69件、学生の出席状況、体調不良の詳細など「学生の体調に関する事」が51件、記録の遅れ、記録内容の不足(看護歴・アセスメント・看護計画立案・実施と評価)、細かい指導が必要、何度も加筆修正が必要、自力では看護過程を展開できず介入が必要、指導を受けても理解力の不足がある、指導を受けても記録が修正できないなど「看護過程の展開に関する事」が44件、学習状況には個人差がある、看護過程の展開に指導や介入を要す、病態把握が困難で資料を提供した、自己学習の不足、実習前学習の不足、言語化できない、意見をまとめられない、言語化できても記述できない、などの「学生のレディネスに関する事」が26件、インシデントの件数や内容の報告、指導者や教員の許可なしに実施した、

患者の移送を学生一人で実施した、指導者の待機の指示があったが患者を静止できなかった、一人で入浴介助を実施した、患者情報を同室患者に話した、患者指導をひとりで実施した、心電図モニターをポケットに入れたまま装着を忘れていた、薬剤をひとりで塗布した、インシデントの振り返りが不十分、振り返りはしたがこれまでも同様の行動を繰り返しているなどの「インシデントの報告」が26件、あいさつができない、積極性に欠ける、表情がない、モチベーションが低い、大人しい、指導に対しての反応がない、または反省の様子がない、記録の提出期限を守らない、またその理由等についての報告がないなどの「学生の実習態度に関する事」が15件、緊張のために看護技術ができない、過緊張状態である、患者の病状悪化に動揺が見られた、重症の患者に対し戸惑いがみられた、病棟師長からの指摘に動揺した、不安がある、涙ぐむ、看護師の適性に悩んでいる、気分が落ち込むなどの「学生の様子や訴えに関する事」が13件、コミュニケーションが取れず介入を要す、患者からの受け持ち拒否、または患者からの気遣い、病状の悪化に伴う関係の悪化など「学生と患者の関係に関する事」が9件、実習グループメンバーの関係が悪い、グループ内で孤立している、グループ内の関係不和に悩んでいる、距離を置き接している、実習をリタイアする者がいたために重苦しい雰囲気があるなどの「実習グループの関係性に関する事」が5件、実習指導教員の状況を踏まえて複数の教員が学内カンファレンスに関わる、学生の生活状況(子供の入院)、学生との連絡が取れない、教員のインシデント報告などの「その他」が6件であった。

2. 実習時期による比較(図1)

発生時期を実習のクール毎に前期・中期・後期に分け、大項目ごとに、問題が発生した時期の件数を比較すると、年間を通して多かった項目は、「臨地実習を実施するための調整に関する事」、「学生の体調に関する事」であった。前期において多かった項目は、「看護過程の展開に関する事」「インシデント発生に関する事」、「学生

表1：成人看護学実習指導上の問題

大項目	中項目	件数
臨地実習を実施するための調整に関すること (69)	実習環境の調整	1
	病棟内の状況	3
	実習施設との調整	7
	受け持ち患者の状況	5
	受け持ち患者の経過	12
	実習スケジュールの調整	3
	受け持ち患者の病態の詳細	14
	実習内容の調整・報告	16
	学生配置の調整	8
学生の体調に関すること (51)	出席状況 (欠席)	17
	出席状況 (遅刻)	9
	出席状況 (欠課)	4
	出席状況 (早退)	3
	出席状況 (公欠)	1
	休学または退学を検討中	1
	診断書の提出	1
	体調不良の報告	15
看護過程の展開に関すること (44)	記録の遅れ	13
	記録の不足	5
	記録の不足 (看護歴)	8
	記録の不足 (アセスメント)	5
	記録の不足 (アセスメント・計画)	1
	記録の不足 (計画)	2
	記録の不足 (実施・評価)	2
	自力では困難	1
	記録への指導が特に必要であった	3
	指導が理解できない	2
	介入すれば実習可能	1
	患者に必要な看護が見いだせない	1
	学生の実習態度に関すること (26)	学生の特別な傾向に対する対応
インシデント発生に関すること (26)	実習施設との情報共有	5
	言語化や記述ができない	5
	学習状況に個人差がある	3
	学習の不足	5
	件数	7
学生の実習態度に関すること (15)	内容	12
	振り返りをおこなった	3
	振り返りが不十分	2
	報告・連絡・相談の不足	2
学生の様子や訴えに関すること (13)	学生の様子 (積極性がない)	6
	指導の効果が見られない	7
	提出期限を守らない	2
	学生が緊張している	3
	学生の反応 (動揺や戸惑い)	3
	学生の反応 (泣く)	1
	学生の行動	1
	学生の不安	3
学生の様子 (疲労)	1	
学生の様子 (指導に対して慌ててしまう)	1	
学生と患者の関係性に関すること (9)	コミュニケーションが取れない	3
	患者への態度が問題	1
	患者からの受け持ち拒否	4
	患者の様子 (学生を気遣っている)	1
実習グループの関係性に関すること (5)	グループの関係性が悪い	5
	学生と連絡が取れない状況	2
その他 (6)	生活状況の問題 (子供の入院)	2
	教員のインシデント報告	1
	教員の経験歴を踏まえた対応	1

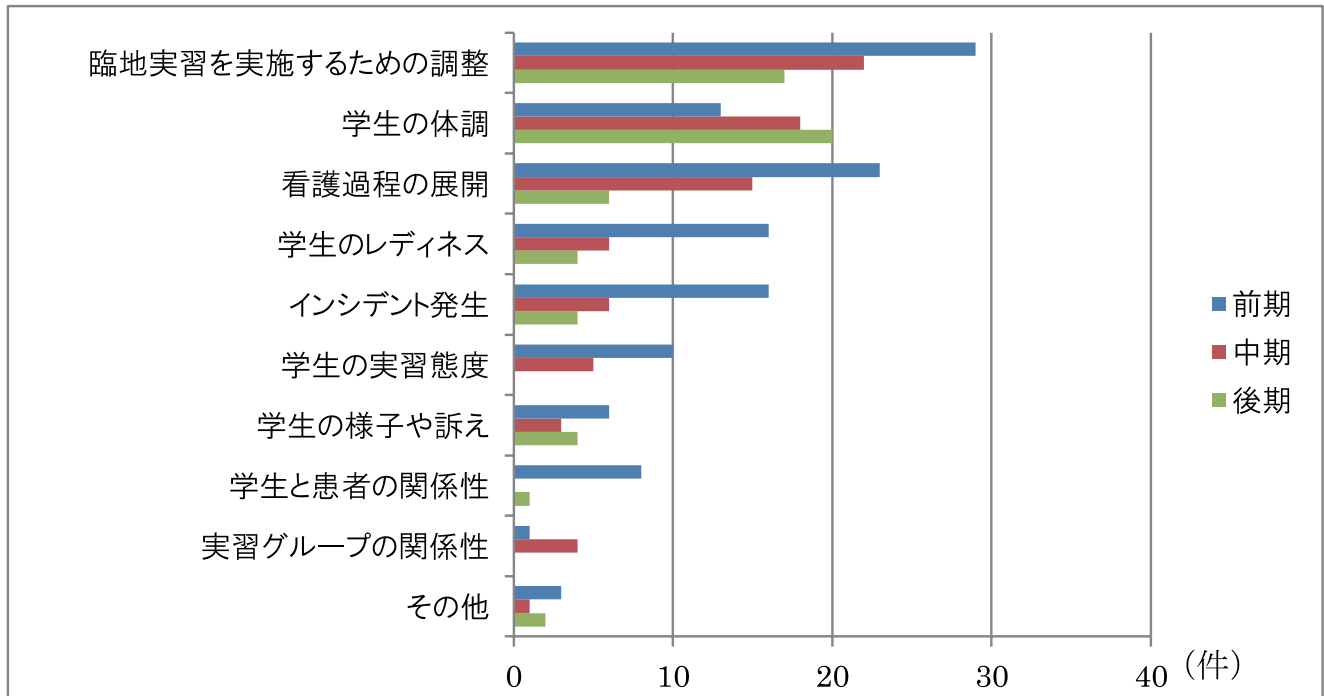


図1：成人看護学実習指導上の問題の実習時期による比較

のレディネスに関すること」であった。「学生と患者の関係性に関すること」、「学生の実習態度に関すること」は、全体的な件数は多くなかったが、実習時期により比較すると、前期に多い傾向があった。

「学生の体調に関すること」は、年間を通して発生していたが、後期に増加する傾向がみられた。

3. 指導上の問題への対応

指導上の問題への対応は、実習環境の調整や、患者選定の相談、受け持ち患者の退院に伴う新たな患者選定、実施可能な技術の確認などの実習施設との調整、機能別実習の実施や患者の治療計画に合わせたカンファレンス日程などの実習スケジュールの変更、学習に遅れのある学生への指導・介入や資料の提供、主体的な気付きを促す働きかけ、またはその学生に対する複数の教員による指導・介入、欠席者への個別な対応や、緊張や不安から不安定になる学生もあり対応に多大な時間を要する場合など、実習中に体調不良を起こした学生の対応、インシデント発生に伴う実習施設や患者への対応と学生への指導、受け持ち患者との関係性の調整や介入、実習グループの関係性の調整など、多岐に及ぶものであった。

それぞれの問題に対し、指導教員が対応し解決が図れないときには他の教員の介入により複数の教員で解決する、との対応策をとっていた。また、成人看護学領域会議や教員カンファレンスを短い期間で定期的を開催することで、教員間の連絡が取れ指導教員がひとりで悩むことなく問題解決へとスムーズに展開することができていた。

VII. 考察

担当教員が感じた実習指導上の問題は、実習指導そのものである「看護過程の展開に関すること」や、「学生のレディネスに関すること」の学習の支援があり、学生の学力差や実習へ取り組む姿勢によっても指導にかかる時間と労力の差が大きい。教員の役割として、「臨地実習実施のための調整に関すること」や「学生と患者との関係性に関すること」という実習環境に関する配慮や調整が必要となる。学生は患者との関わりに緊張し、コミュニケーションに苦慮している場合も多く、関係形成には教員の介入が必要なこともある。実習中には「インシデント」も起こる可能性があり、発生すれば対象となる患者や実習施設にも影響を及ぼすために、その後の教員の対応は複雑で細やかな

配慮を必要とする。「実習グループに関すること」では、グループメンバーによっても介入の必要性に差があり、多忙な学習環境の中で体調を崩す学生も多いため、「学生の体調に関すること」や、学生は緊張しており感情の動きも不安定となることもあるために「学生の様子や訴えに関すること」といった学生個人の傾向など、実習指導上の問題は多岐にわたっていた。

山本ら²⁾によると、教員の指導困難場面・事象から抽出した学生の要因は、心理的状況・レディネス・援助関係形成・看護技術・学生と教員間の関係性の5つの要因があると述べている。

本研究においても、学生の要因として「学生の体調に関すること」、「学生の様子や訴えに関すること」、「学生のレディネスに関すること」、「学生と患者の関係性に関すること」、「看護過程展開に関すること」、「学生の実習態度に関すること」、が抽出されており、心理的状況・レディネス・援助関係形成・看護技術・学生と教員間の関係性の5つの要因と同様の結果が得られている。異なる項目は、「臨地実習を実施するための調整に関すること」、「実習グループの関係性に関すること」の2つである。本研究においては、教員カンファレンスの議事録を研究対象としたため、学生の要因だけではなく、実習をおこなうために必要な対応や同じグループの学生同士の関係性についても抽出されており、実習環境に関することも含まれた結果となっていた。

次に、実習時期の比較について述べる。学生にとって臨地実習は、それまでに学んだことを実践するという課題を、新しい場所や人との出会いの中で展開していくストレスフルな体験である。³⁾ さらに、実習環境は、学生にとって十分でない知識、未熟な技術、慣れない環境で初めての体験をする緊張の連続の場である。⁴⁾ 実習の前期に指導上の問題が多い背景には、学生の要因として、不慣れた実習現場での緊張や、知識と技術に関するレディネスが考えられる。実習時期により件数が増減した背景には、学生が領域実習の経験を積み、少しずつ技術を習得し、取り組むことに困難を感

じる機会が減少していることや、学習が深まってきたことなどが推測できる。教員側の要因として、指導経験の少ない教員や、一人では判断しきれないような状況に対する対応システムの有無、実習指導上に起こる問題の傾向、例えば、学生の行動・思考の傾向やリスク、陥りやすい悩み、学習のペースなどについて、教員が予測や予防的な対応ができるかどうかは、指導経験によっても左右される。実習環境の要因として、実習をおこなうための施設の準備状況や、病棟指導者の指導経験の有無などもあげられる。

「学生の体調に関すること」が、後期に向けて増加している背景には、学生は、実習だけでなく就職活動や国家試験に向けての学習に対して並行して取り組んでいるため、身体的にも疲労が蓄積しやすい状況に置かれていることが推測できる。

指導上の問題は、臨地実習実施のための調整や学生と患者との関係性、学生個人の傾向など多岐にわたり、多忙な学習環境の中で体調を崩す学生も出現し、教員の対応は複雑でその場により異なるものであった。さまざまな指導上の問題に対し、個別の指導・介入が必要な状況が示されており、問題への対応は、実習指導を担当している教員がその場で調整できる場面もあるが、学生のレディネスや看護過程に関する問題に対し、学生に個人的に指導・介入をしており時間と労力を注ぐ場合が多い。

学生のレディネス、教員側の要因、実習施設の準備状況等の視点からも、実習前期に指導上の問題を抱えることが多いため、複数の教員での対応や指導経験の少ない教員への支援が必要である。

本研究では、教員カンファレンスの議事録を研究対象とした。議事録に残された内容を抜き出すことで、実習指導教員自身が困難と感じた場面、教育上起こった事実を取り上げることができたが、議事録は出た意見を要約しながらまとめるため、実際には議事録に表現されていない教員の思いや背景が捉え切れなかった可能性もある。その点を考慮すると、録音などのデータ収集方法を検討することも必要であった。

VIII. 結論

1. 議事録に報告された質的データは10個の大項目に分類され、指導上の問題は多岐に渡っていた。
2. 学習に関することや実習態度、学生と患者の関係、インシデントに関することが実習前期に多かった。
3. 学生の様子や訴えに関することは、実習時期に関わらず報告があった。
4. 指導上の問題は、臨地実習実施のための調整や学生と患者との関係性、学生個人の傾向など多岐にわたり、体調を崩す学生への対応など、教員の対応は複雑かつ流動的でその場により異なるものであった。
5. 実習前期において教員の負担が大きく、複数の教員での対応や指導経験の少ない教員への支援が必要である。

IX. 謝辞

本研究をまとめるにあたり、ご指導、ご協力くださいましたすべての皆様に感謝申し上げます。

本研究は、平成25年度仙台青葉学院短期大学特別奨励研究（採択No.特奨2506）によるものである。

尚、本研究の一部は、宮城看護学会第10回学術集会にて発表した。

X. 引用・参考文献

- 1) 平木民子 (2000) : 看護専門学校教員の臨床指導上の困難, 日本赤十字看護大学紀要, No. 14
- 2) 山本美津子 (2003) : 成人看護学実習における指導困難状況の要因, 聖母女子短期大学紀要第16号
- 3) 川島みどり (2007) : 学生のためのヒヤリ・ハットに学ぶ看護技術, 医学書院, 東京都
- 4) 土屋八千代 (2003) : 看護事故予防学, 中山書店, 東京都
- 5) 三枝香代子 (2007) : 成人看護学実習において学生が体験する困難 - 卒業生のアンケート

ト調査を基に、千葉県立衛生短期大学紀要, 26巻第1号

- 6) 青木光子 (2008) : 基礎看護学実習における看護技術実施時の学生の困難と対処方法, 愛媛県立医療技術大学紀要, 5 (1) 57-64
- 7) 杉森みどり, 舟島なをみ (2012) : 看護教育学第5版, 医学書院, 東京都
- 8) 中西睦子 (1983) : 臨床教育論 体験から言葉へ, ゆみる出版, 東京都